紀伊國屋書店の皆さまへ

「キノベス！2023」第2位、ありがとうございます！
感謝のしるしに、紀伊國屋書店のお話を書きました。
皆さまがお勧めのお店でこんな名も無き
人間模様が展開されているのがもしかしてみいいい
と思いながら。
ささやかな物語ですが、楽しんでいただけますように。

これからもよろしくお願いいたします。

―穂ミチより

forget you not

紀伊國屋って、ほんとどこにでもあるんだな。

ドバイのショッピングモールをぶらついていると、突然現れた「BOOKS Kinokuniya」の看板の前で、僕は思わず立ち止まった。ウッディな柱には「紀伊國屋書店」という漢字の店名もちゃんと入っている。商談が思いがけず早く終わり、夜の会食までの自由時間を持て余しているところだったのでふらりと入ってみると、とても開放的で気持ちのいい空間だった。広大なドバイモール内では感覚がバグってしまいそうだが、日本でもなかなか見かけないレベルの大型店に、ゆったりと棚が配置されている。定番のクールジャパン推しで日本の漫画やフィギュア、ファンシーグッズが目立つ場所に陳列されていて、普段は気にも留めないくせに、異国で見慣れたコンテンツに巡り合うとうっすら安堵する。小説の棚に行き、何のストレスもなく頭に入ってくる日本語のタイトルや帯の文言を堪能した。しかし、海外出張に行く際にはあらかじめ大量の電子書籍をタブレットにダウンロードしておき、結局読みきれないまま帰国するのが常だからレジには持って行かない。何より、日本で買うよりずっと高い。僕は頭を巡らせ、ゆっくりと広い店内を見渡す。それはここ数年で染みついた僕の癖だった。紀伊國屋書店に立ち寄ると、いくつも続く書棚の向こうや柱の影に目をさまよわせてしまう。たとえばこのドバイモールみたいに、いるはずがないとわかっている土地でも。

そういう歌があったな、と視点が落ち着くポイントもないほど漠然と広い空間でひとり思う。いつでもどこでも探してしまう、みたいな。妻は「勘違いストーカーソング」と嫌っていた。僕は、気持ちがわからないでもない。ただ、あの歌は「もし願いが叶うなら君のもとへ行って抱きしめる」というような歌詞

だったはずで、それは違うなと思う。叶ったとして彼女のもとへは行かないし、もし今、目の前を、何の偶然でか彼女が横切っても僕は話しかけず、目も合わせないだろう。だからこそ、探してしまう。ひょっとすると、もう出会えないことを確かめて安心したいのかもしれない。

店内のカフェでノートパソコンを広げ、業務連絡のメールを打っていると、私用のスマホにLINEが入った。ここ数年年始の挨拶さえ交わしていない大学時代のサークル仲間からで、通知欄に表示された『あの子のこと、聞いてる?』というシンプルな文面に胸が騒いだ。『いや、何のこと?』と送るとすぐに既読がつき、数分経ってから『今話せる?』と返信があったので僕から電話をかけた。

『もしもし?　久しぶり、ごめんね。今仕事中?』

「出張中だけど、空き時間だから平気」

『そう……あのね、あの子、亡くなったらしいんだけど』

「なんで?」

自分の声が、責任を問うような厳しいものに聞こえ、僕は慌ててトーンを和らげた。

「事故とか、病気してたとか?」

『わかんない』

「わかんないって」

『きのう、うちの親から聞いただけなの。あの子のご両親とけっこう仲よかったから。急死して密葬を執り行いましたって言われたんだって。これ以上訊くなって雰囲気だったみたい。わかるでしょ、ていう。だから、ひょっとして……』

友人は言葉を濁した。僕は、日本にいる二歳の娘の顔を思い浮かべる。あの子が僕より早く、それも自らの意思で逝ってしまったら――考えるだけで恐ろしい。どんな災害より疫病より、この世で起こってはならないことだった。でも、彼女の父親の身には降りかかってしまった。何度か顔を合わせたお父さんの顔はほとんど思い出せない。そのくらい時間が経ったのだ。僕が親の立場で考えるようになってしまうほどには。父親は空調メーカーの技術職として東南アジアの各地に赴任し、彼女も小学校時代はバンコクやシンガポールで暮らしていたらしい。

――ホームシックになったお母さんが、現地の紀伊國屋にしょっちゅう連れて行ってくれたから、わたしも紀伊國屋びいきなの。本なんてどこで買っても同じだろ、と言う僕にそう教えてくれたのは二十歳の彼女だったっけ、それとも二十一歳?

『わたしも地元離れて長いから全然会ってなかったし、ご実家に電話かけるのもね……だから、あなたなら何か知ってるんじゃないかと思って』

「いや、今初めて聞いた」

『ごめん』

「いや。教えてくれてありがとう」

『うん……今だから言うけど、わたし、責任感じる時、あった』

「え?」

『あの子、神経質で繊細だったでしょ。だから、陽気で大らかな男の子が合うんじゃないかなってふたりを引き合わせて、でも、あなたはすごく苦労してたよね』

「苦労っていうか――」

今度は僕が言い淀む。ひと言で言い表せるようなものじゃない。八年も一緒にいたのだから。

「――別に強制されたわけじゃない。僕も彼女も、自由意志でつき合って別れたんだから」

『でも』

「ごめん、もうすぐ会議なんだ。切るよ」

僕は一方的に通話を打ち切り、高い天井を仰いだ。悲しみでも

後悔でもなく、心の中には無色の空間が広がっていた。感情が流れ込む出入り口の弁が閉じてしまったように何も思わなかった。

彼女と初めて会ったのは、お互いが二十歳の時だった。サークル仲間の幼馴染だという彼女と三人で学食のランチセットを食べ、すこし話して、割とスムーズに「今度ふたりで遊びに行こう」という流れになると、彼女は「じゃあ、新宿の紀伊國屋前で待ち合わせね」と言った。僕はスーパーマーケットの紀ノ国屋だと思い、「新宿の紀ノ国屋ってどこ？」と尋ね、「は？　あるじゃん」「え、知らない」と間抜けなやり取りがあった。勘違いに気づくと彼女は「スーパーの前で待ち合わせなんかしないでしょ！」と大笑いし、僕が「書店で待ち合わせもしたことない」と言い返すと目を丸くした。初めてデートした紀伊國屋新宿本店で、彼女は「記念に本を買ってあげる」と言った。

――漫画でもいい？

――だめ。そんなの、自分でも買うでしょ。

――全然読まないから、どれがいいのかわからない。

――ほんとに文明人なの？

彼女は呆れ、その時フロアに大きく展開されていたコーナーを指差した。

――ほら、これ、「キノベス！」だって。お店の人のおすすめ。きみのような人のためにあるんだよ。

その時彼女に何を買ってもらったのか思い出せないのに、僕を「きみ」と呼ぶ時の軽やかで小気味いい響きは生々しくよみがえってきて、思わずスマホを持っていない方の手で耳を押さえた。

モールから、タクシーにもメトロにも乗らず、昼下がりの路上をふらふら歩いた。寒いくらい冷房の効いたモールとは三十度以上の寒暖差がある。日本の、全身を締め上げられるような息苦しい暑さと違い、ドバイは熱を固めた鈍器で脳天をぶん殴られるようで、スーツにネクタイという、この土地では常軌を逸したいでたちの僕はたちまち目まいを覚える。じわじわ滲む汗ではなく、玉になって浮かぶ汗が歩くごとに揺れ、崩れ、流れ出す。記憶も汗に溶け出してしまえばいいのに。僕たちは八年間、恋人同士だった。幸せな瞬間もあれば目を覆いたくなるような場面もあった。

紀伊國屋と紀ノ国屋みたいな行き違いを笑えなくなり、ずれたまま無理に回し続けた歯車が軋み、砕ける寸前で別れた。修復しようと努力すること、修復したいと思うことさえ、もう無理なのと彼女は言った。エキセントリックで、自分自身でも度し難い喜怒哀楽に苦しんでいた彼女が、その時は泣かなかった。僕は――正直、ほっとしていた。彼女は面倒で、重かった。その重さすら魅力だと受け止めるには新鮮味が必要で、八年の間にそれは失われてしまっていた。つき合ったことを後悔した夜も、確かにあった。

でも、不幸になれとか、ましてや、死んでしまえなんて、一度も思ったことはないのに。ちくしょう。

そのままあてどなく歩いていたが、直射日光に痛めつけられ、足がふらついてきたのでタクシーに乗ってホテルへ戻った。車内でたちまち汗が冷えて今度は肌寒く、身体の恒常機能がどうかしてしまいそうだ。

バスタブに湯を張り、スーツケースから文庫本を取り出した。電子機器の防水機能をあまり信用していないので、出張先で風呂に入る時は濡れてもいいような読み古しを適当に見繕う。家では悠長に長風呂などしていられないので、湯船での読書は酒もカラオケも苦手な僕のちょっとした楽しみだった。本を読む習慣がついたのは、紛れもなく彼女のおかげだ。

ざっとシャワーを浴び、浅く長い海外仕様のバスタブに半ば寝そべりながら、僕は「転がる香港に苔は生えない」を開いた。旅先では異国を描いた本を読みたくなる。もう再々々読くらいなので、適当な

ページから適当に目を通す。香港に行ってみたいね、といつか彼女が言っていたことを思い出す。海外旅行なんてできるタイプじゃなかったくせに。交通機関が時間どおりに来ないとか、タクシーにぼったくられるとか、トイレが汚いとか、そういう環境に耐えられない人だった。ストレスを笑いや思い出に昇華させられない。それでよく海外暮らしができたな、と僕が言うと、彼女は「子どもだったし」と肩を竦めた。

――子どもの頃は、平気で道に手をついたりできるでしょ。大人になって「汚い」ってことを知ると、もう全部が無理なの。

彼女は古本も図書館も「無理」だった。だから本屋が好きだった。彼女の「無理」はいつも切実で、目をつむるとかぐっとこらえるということができなかった。わがままではなく、自分の頑迷さに誰より困っていたのは彼女自身だった。

浴室の天井から落ちてきた水滴が目に入り、指で擦る。その拍子に読みかけの本の間から何かがひらりと落ち、湯に浮かんだ。慌てて掬い上げると、レシートだった。紀伊國屋新宿本店の。

『わたしを離さないで』

小さな印字に、指先がふるえた。

二〇〇七年の、春の日付。

驚いたせいで踵がずるっと滑り、身体が浴槽のカーブに沿って沈み込む。右手にレシート、左手に文庫本を持ち、万歳みたいな間抜けなポーズで僕は額まで湯に浸かった。こぽこぽとあぶくが浮かぶ音がする。それが昇って消えるまでの僅かな間に、彼女との記憶がいくつもいくつも弾けた。たとえば、彼女は風呂に浸かりながらアイスクリームを食べるのが好きだったこと。いつもバニラだったこと。彼女と別れてから半年以上経って、冷凍庫に入れっぱなしだったバニラアイスを食べると、なめらかさを失ってすかすかした舌触りだったこと。アイスクリームに賞味期限がないなんて嘘だろ、と思った。

僕たちが初めて待ち合わせをし、彼女が本を買ってくれた日のこと。カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』。どうしてここに挟んでいたのかは思い出せないけれど、確かにあの日は存在した。スニーカーのつま先を玄関のタイルに押しつけ、扉を開けて、彼女に会いに行った日。陽射しを浴び、柱の前で片手を上げ、笑った。あの日の僕たちがこのふやけた紙切れの中に閉じ込められているような錯覚に拳を握り、歯を食いしばる。彼女にとって僕は、僕との八年は、何だったんだろう。それを尋ねる妄想の余地すらもうなくなってしまった。

膝を曲げ、踏ん張って上体を起こす。髪や顔からぽたぽたと水滴が落ちたが、涙は混じっていない。最後の彼女が泣かなかったように。最期の彼女のことは、知る由もない。掌のレシートはくしゃっと丸まり、無理に広げようとすればもろもろと崩れてしまうだけだろう。

ホテルの窓から外を見ると、奇抜なデザインの高層ビルが林立し、道路が行き交い、そのずっと向こうに砂漠が広がっている。この人工都市の維持管理を数ヶ月でも怠ればたちまち荒廃して砂に覆われてしまうのかもしれない。たぶん僕たちも似たようなもので、絶え間ないメンテナンスの繰り返しに彼女が力尽きたのだとしても、無理はない。

僕は――これから髪を乾かし、新しいシャツを着て夜の会食に備える。すこし早く出て、紀伊國屋で何でもいいから本を買おう。きょうの痛みが刻印されるように。やがて忘れる僕のために。